

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

# もののふガールズ

剣と恋と免許皆伝

小説 蒼井村正

挿絵 天草帳

序章

入部

第一章

近代剣術部、始動！

第二章

メガネツ娘の誘惑

第三章

金髪少女剣士の挑戦

第四章

嵐の合宿練習

第五章

剣もエツチも免許皆伝？

## 登場人物紹介

Characters



### みさわ れい 三沢 玲

近代剣術部の部長。黒いショートカットが凛々しいクールビューティー。女ながら剣の腕前はなかなかのもの。

### ゆうき みよ 結城 美与

赤いツインテールが特徴的な天然系の爆乳メガネっ娘。玲とは幼馴染み。メガネを外すとある秘密が……？

### クロエ・レーヴァンティン

日本に剣の修行のために来ている留学生。代々の騎士の一族出身のためか、剣の道一筋で、生真面目な性格。

### ならさわ しゅうや 櫛沢 修也

竹刀など握ったことがないが、生来の才能を持っている少年。やや女性に惚れやすい。

「だからあ、いいんだよ。『据え膳食わねど高楊枝』って、昔から言うでしょ？」

「え、ちよ、それはかなり違うと思いますけど……うひい！」

（結城先輩って、国語はきつと苦手なんだろうなあ……）とか、失礼なことを思ってしまったながら、やんわりとツッコミを返した修也の股間に、美与の手がそつと這わされる。

布越しに送り込まれるささやかな刺激にも、若い勃起は敏感に反応し、ビクビクビクッ！ としゃくり上げた。

「硬くなってる……すごい、ピュクピュク動いてる！ あたしね、玲ちゃんと約束してたんだ。もしも、理想の男の子が現れたら、あたしもその人のお嫁さんになる、って。玲ちゃんも、それがいい、そうしようって言ってくれたよ」

ジンジンと疼き昂る生殖器を布越しに撫で回しながら、ツインテールのメガネ少女は、いつもと変わらぬ無邪気な口調で語りかけてくる。

「はうう……そこは、あひッ！ ヒッ！ で、でも、それって、子供の頃の話でしょ？」

敏感な亀頭をくすぐるように弄られ、眉を寄せて喘いでしまいがら問い返す修也。

下着の内側では、既に先汁の分泌が起きており、尿道内をむず痒く疼かせながら、ぬめりの強い男の子の愛液がチュルチュルとこみ上げてきている。

「結城先輩ッ、これ以上は……僕……ダメですッ」

快感に流されてしまいそうな自分を叱咤した少年は、巧みに勃起をまさぐってくる巨乳上級生の柔らかな身体を押しつけようとする。いくら美与の方から仕掛けてきたとはいっ

でも、修也には彼の『鞞』となることを宣言してくれた、玲という女性がいるのだ。

(両想いになった次の日に浮気なんて、ダメだ！ 絶対にダメだよ……！)

ツインテール少女の身体から薫るいい匂いと、胸に押し付けられた爆乳の堪らない弾力に理性を掻き乱されながら、少年は抵抗を続ける。

「今でも有効な約束だよ。昨日、確認済み。玲ちゃんも言ってたよ。『修也を、男として研ぎ上げるのを手伝ってくれ』って。だから、遠慮なんていらんだよ。えいッ！」

ストラックスのベルトがせつかちな手つきで外され、ジッパーが引き下ろされる。

「だから……あたしとも……ね？ ラブラブしちゃっても、誰も怒らないんだよ」

メガネのレンズ越しに、クリッとした、愛嬌のある目で少年を見つめながら、玲の親友である巨乳少女は誘惑の声をかけてくる。

「え、でっ、でも……あううう……」

優柔不断な少年が、覚悟を決めかねている間に、制服のズボンがずらされ、見事にテントを張ったトランクスがメガネ少女の視線にさらされた。チェック柄のトランクスには、先汁の濡れ染みがじわじわと広がり続けている。

「わお、ツッパリ君登場！ 男の子って、わかりやすいよね。これも、脱がしちゃうよ」  
無邪気な声で言いながら、美与は、最後の一枚もズリ下ろしてしまふ。

若い血潮で張り詰め、薄紅色に充血した生殖器が、プルンッ！ と跳ねながらあらわになった。

血色のいい肉柱は、海綿体をはち切れさせんばかりに送り込まれた若い血潮でパンパンに張り詰め、薄く敏感そうな皮膚越しに、血管をくつきりと浮き出させている。

通常は亀頭を包み込んでいる包皮は、カリ首の根本に一まとめになって剥き返り、露出した肉刀の切っ先は、かすかな牡臭を立ちのぼらせていた。

熟れたトマトのように赤く色付き、ふっくらと張り詰めた亀頭先端のワレメには、たっぷりと分泌された先汁が、小さな液珠となつてきらめいている。

「わあ、ホントに男の子も濡れるんだね。本で見たとおりだ……。修びよんだけ見せてるのも不公平だから、あたしのオッパイも見せてあげるね……」

上半身を起こした美与は、メガネのレンズ越しに、勃起をじつと見つめながら、シャツの胸ボタンを一つずつ外してゆく。

ただ、ボタンを外しただけなのに、乳房の内圧に押し開かれたシャツの前が大きくはだけられ、飾り気のない白いブラに包まれた過剰サイズの肉果があらわになる。

「ゴクンッ……」

少年が生唾を呑み込む音が、異様に大きく部室内に響いた。

「男の子にオッパイ見られるのって、初めて……やっぱりちよつと恥ずかしいね」

恥じらいに頬を染めてはにかみながらも、美与はブラのホックを外し、ゆつくりとズリ下げる。ブラのカップが外されると、張り詰めた乳球が揺れながら飛び出してきた。

「おっ、大きい……」

無意識のうちに、感嘆の声を漏らしてしまふ修也。

それは、圧倒的な肉の果実であった。

小玉スイカを二つ並べて詰め込んだようなボリユームを誇示しているにもかかわらず、下着の保持を失ってもほとんど垂れない張りを持っている。

淡いピンク色の乳輪はやや大きめだが、その中心でプックリと尖り勃った乳首は小さく慎ましやかだ。小指の先ほどに勃起した乳頭の先端が、針で突いたようにポツンと窪んでいるのが妙にいやらしい。

剥き出しになった爆乳は、下着の拘束から解き放たれたことで、さらにサイズを増したように見えた。

(凄いオッパイ……。剣道で、胸の筋肉も鍛えているから、あんなに大きいのに、垂れちゃわないんだろな)

たわわなバストに視線を釘付けにしたまま、少年は思う。

股間では、正直なペニスがピクンピクンとしゃくり上げて下腹を打ち、ツイントールの爆乳メガネ少女に喝采かっさいを送っていた。

「みゅうう、修びよんの視線、くすぐりたい……。さっ、触っても、いいよ……」

恥じらいつつ発せられたその言葉を待っていたかのように、修也の手が伸びる。

ぷにゅんっ……。未知にして至上の触感が、指先を包み込んだ。

(すごいッ！ こんなの、初めてだ……)

昨日、欲望のままに揉みこねた玲の乳房とついつい比較してしまいながら、修也は思う。すっかりとした筋肉の反発力を感じさせた玲のバストよりも量感に勝る肉果は、どこまでもめり込んでいきそうな柔らかさで少年の揉み指を吸い込んだ。

掌に吸い付いてるもっちりとした乳肌の感触と、ほのかな体温、そして、肉の深みに到達した揉み指をやんわりと押し返してくる筋肉の弾力に興奮した少年は、我を忘れてたわわな肉果を揉みしだいた。

ムニユツ、モニユツ、プリユツ、ニユムンツ、フニユ、フニユ、プニユツ……。

無心になつて蠢かせる指の間で、柔らかな乳肉が縦横無尽に形を変える。

「ンツ……んふう……ツ　ひゃふっ！　ンツ、あ、んひゅう……あふ、にゅううん」

時折、揉み指が乳首をかすめると、美与の身体がピクンツ！と反応し、鼻にかかった個性的な呻き声が漏れる。堪らなく柔らかな乳房の中で、乳首だけがコリツとした質感を誇示して揉み指に弾かれ、ピンツ、プルツ、プリユンツ、と可愛らしく揺れた。

（乳首、勃つてる。吸いたい。けど、今はこの柔らかなオッパイをずっと揉んでいたい）

ハアハアと息を荒げながら、少年は超特盛りのオッパイを欲望のままに揉みこねた。

「あんツ！　そんなに強くしないで。もっと優しく、ゆつくりと、こんな感じで……」

ついつい力が入ってしまう少年の指に手を添えた美与は、両手でも掴みきれない特大サイズの乳球を、下からすくい上げて円を描くようにこね回し始める。

修也の指に、蜂蜜をたっぷり詰めた水風船を思わせる、乳肉のしつかりした重み



が伝わってきた。

「ふにゃあ、こうすると、身体の奥からホンワカしてきて気持ちいいんだよ……」

メガネのレンズ越しに、上目遣いで少年の顔を見上げつつ、乳揉みのレクチャーをする美与。

「そろそろ、修びよんも気持ちよくしてあげるね。これ、一度やってみたかったんだ」  
美与は、修也の胯間に上体を被せてくる。

「えっ、もっ、もしかして……!?!」

「そう。パイズリっていうやつ。ほおら、修びよんのオチンチン、挟んじゃうよ」

ポリウムたつぷりの乳肉が、ささやかなサイズの勃起を、その根本で固く引き締まった陰囊もろとも、完全に包み込んでしまう。

柔軟性に富んだ柔肉は、挟み込まれた性器の形にぴったりとフィットして、敏感な肉柱全体に優しい圧迫感を伝えてきた。

「ふあ！ ああああ……すごい……」

紅潮した顔をのけぞらせて、陶酔の声を漏らす修也。

ほのかに冷たく、むっちり、フワフワの爆乳に挟み込まれたペニスは、柔肉の抱擁を悦んでビクッ、ビクッ、としゃくり上げ、硬度と体積をさらに増した。

「ふあ……変な感じ。ほら、さっきみたいにモミモミしていいんだよ。修びよんの好きなように、あたしのオッパイでオチンチン気持ちよくなっちゃって」

甘い吐息で少年の下腹をくすぐりながら、美与は誘いの言葉をかけてくる。

「はっ、はいッ！ ウッ……んっッ！」

頭がクラクラするほどの興奮を覚えつつ、少年はたわわな肉果をこね回し始めた。

鷲掴みにした乳房を擦り合わせるようにすると、谷間に挟み込まれたペニスのみならず、陰囊や内股までが、なめらかで柔らかな乳肉にムニユムニユと揉み擦られる。

ふにゅっ、ふにゅっ、しゅりっ、クチュ……ムチュツ、又チュツ……。

早くも溢れ出した先走りが、乳肌の狭間でこね回されて、いやらしい粘音を立てた。

「んはああ……僕の……全部、先輩のオッパイに包まれてますッ！」

「みゅふふっ、修びよんのタマタマちゃんやんが、オッパイに挟まれてコロコロしてるのを感じるよ。オチンチンもビクビクしてて……おおッ、何か、出てるよ。これって射精？」

バストの狭間からムンムンと立ちのぼる男の子の匂いに目を細めつつ、ツインテールのメガネっ娘は好奇心剥き出しの質問を投げかけてくる。

「ちっ、違います……カウパー……ガマン汁ですッ。ンンンッ！」

又チュ……クチュ……チュクツ……。

揉みこねられる双乳の狭間から聞こえる粘着音が、どんどん大きくなってきた。

大量分泌された先汁が、ローションの役目を果たし、乳肉とペニスの摩擦快感を増幅させている。ぬめりを帯びたなめらかな乳肌に擦られた海綿体は、ゾクゾクと鳥肌立つような悦波を絶え間なく発生させ、まだ快楽慣れしていない少年を追い詰めてゆく。

無意識のうちに、修也は腰を使い始めていた。薄い尻肉に筋肉のえくぼを浮かばせてカクカクと下半身をせり上げ、熱く潤んだ乳肌で勃起全体を擦りまくる。

ヌチュ、ヌチュ、ヌチュ、クチュ、クプチュ……

乳房とペニスの狭間でガマン汁がこね回される音を立てながら、ポリウム満点な肉果の合わせ目で、ペニスが抽挿された。それはまさに、乳房とのセックス。性器よりも刺激は穏やかだが、包み込まれているという感触ははるかに強く、何よりも、巨乳でペニスを挟み込んで快感を貪っているという視覚的な興奮度が半端でない。

「うくあ……あ、ンツ……ハア、ハア、ハア……はうらうら」

快感の呻きを漏らしながら、修也は乳房をこね回し、爆発寸前にまでいきり勃った牡器官を肉の狭間に突き入れて、乳房との性交にのめり込んでゆく。射精まで秒読み段階になった肉柱がひときわ硬く張り詰め、腰使いがぎこちなくなってきた。

「にゅあ……んふう……ンツ、はっ、はい、ちよつと中断ね」

いきなり、美与が身体を引いた。

チュプツ！ ヌチュルンツ！

きらめく粘液の糸を引きながら、射精寸前の勃起が爆乳の谷間から抜け落ちる。

「あああつ！ どうしてえ!？」

未練がましく空腰を使ってしまいながら、情けない声を上げてしまう修也。

「今度は……あたしがしてあげる。出しちゃってもいいからね」

メガネのレンズをキラリ、と光らせて、少し恥ずかしげに言った美与は、先汁でぬめ光る乳房の谷間に、寸止めを食らって苦悶中のペニスを挟み込んだ。

「じゃあ、行くよ。何か注文があったら、言っただけ……」

クチュツ、又チュツ、チュクツ、又チュ又チュ又チュ……ツ。

張り詰めた肉果が、快感の律動を開始した。

「ふあ、あ、……うああああ！」

パイズリ奉仕のリズムを覚えた美与は、たわわな肉果を左右からギュムギュムと揉み寄せ、上下に細かく揺すり、緩やかな円を描いてこね上げて、緩急交えた複雑な摩擦刺激でペニスを悦ばせる。

ピッチリと寄せ合わされた爆乳は、性器への挿入や手コキとは全く異なった、未知の快感を発生させて、修也の性感をどんどんと昂らせていった。

「うはああああ、僕の……僕のチンポが、狂っちゃウツ！ いつ、ヒツ、くうあああ〜！」  
神経が焼き切れそうな快感を送り込まれた少年は、もたれかかったマットレスに爪を立て、怒濤のパイズリ責めに耐えている。

「あたしのオッパイで、気持ちよくなってくれてるんだね？ 嬉しいよ……んふう……」

下級生の悶えっ振りを、紅潮した顔で見つめながら、美与はさらに激しく、淫靡に乳房をこね回す。

又チュ又チュ又チュ又チュ又チュツ！ クチュクチュクチュクチュクチュルンツ！

激しく擦り合わされる乳房の狭間で、男の子の愛液が、きめ細かなクリーム状に泡立てられ、それが勃起をくまなく包み込んでヌルヌルと揉み扱いた。

粘液の薄膜を間に挟んで、なめらかな乳肌が亀頭のくびれにピッチリと密着しながら、カリ首全体を舐め上げるように滑り、尿道を圧迫してガマン汁を容赦なく搾り出す。

ぬめり気を絶え間なく補給しながら、乳房を貪る乳肉の蠢きは、クライマックスに向かつてさらにハードさを増していった。

「あああッ！ だっ、ダメですッ！ 出ルッ！ 出ちゃうっ！」

制御不能の放出欲求が、勃起の奥からこみ上げてくるのを感じた修也は、ブリッジでもするかのよう尻をせり上げて絶頂の声を上げる。

「いいよお、出してえ、顔にかけてえ〜」

鼻にかかった声で言った美与は、わずかに身体をずらし、切羽詰まった痙攣を始めている勃起を、乳肉の拘束から解放する。男の子の愛液に濡れそぼった乳房の狭間から、茹で上げられたように充血した濡れ龟头が、ヌチュリ、と顔を覗かせた。

「射精、しちゃえ！」

小悪魔的な笑みを浮かべて言った美与は、バストをこね回す動きをさらに早め、肉果の谷間から顔を覗かせる濡れ龟头に、尖らせた舌尖を差し伸べる。

ツプッ、クチュッ！

先汁でトロトロになった鈴口を押し開いて、舌の先端が尿道口に挿入されてきた。

「あひいつ！　でッ、出るううううッ!!」

射精寸前で超敏感になっている尿道口に、かすかにざらついた味覚器官がめり込んでくる異物挿入の快感が、射精のスイッチを押していた。

制御不能の痙攣を起こした射精筋によって搾り出された濃厚なスペルマが、気が遠くなくなりそうなる痒さを置き土産にして尿道内を駆け上ってくる。

ビュクッ、ビュクビュクビュクッ！　ビュウウウッ！　ビュルウウッ、ビュクンッ、ドビュルルッ、ビュルッ、ビュルッ、ビュルッ、ビュルルルッ！

最初に放たれた白濁の塊が、メガネのレンズに、ピチュッ！　と粘音を立てて弾け、続いて白い紐状に連なって迸った濃汁が、茹で崩れたパスタをぶつけたように、メガネ少女の顔に粘り着いた。

前立腺液よりも精子成分の多い特濃の精液は、異様なほどの粘性を発揮して、射出された形のまま、少女のメガネに、鼻先に、頬や額、前髪にまでビチャッ、ビチャッ、とこびりつく。

「ふやああ……すごい、うふう……こんなに出るの？　にゅあ……温かい……」  
精液まみれになった顔を拭いてもせず、うっとりとした声を上げる美与。

「ごっ、ゴメンなさい、すぐに拭きますから！」

狼狽した声で言いながら、脱ぎ落とされたズボンのポケットからハンカチを引っ張り出した修也は、特に精液の付着量が多い美与のメガネをそつと外した。



震える手でハンカチを持ち、メガネを拭こうとしていた修也のペニスに、美与の指がシユルリと絡み付く。

「ひゃあうっ！」

射精の快感さめやらぬ牡器官がビクビクビクッ！と痙攣し、尿道内に残っていたスペルマの残滓を鈴口から噴きこぼした。

「ダメ……拭いちやうのはもったいないわ……こんなに出して、いけない子ね……」

スペルマのぬめりを利用して、ペニスをヌチュヌチュと扱き上げながら、さつきまでとは打って変わった艶めかしい声で言った美与は、唇に粘り着いたゼリー状の牡汁を、ペロリと舐め取った。

「クチュ……んふっ、そんなに苦くないのね。温泉玉子の白身みたい。ねっとりしてて、いやらしい味がするわ」

妙に生々しい感想を漏らしながら、少年の絶頂汁を舌の上で転がし味わうツインテール少女。その、あまりに淫靡な様子に、修也は言葉も出せずに圧倒されてしまう。

（結城先輩が、僕の……精液、舐めてる……）

女の子の淫らさにかすかな恐怖を覚えるのと同時に、異様な興奮がこみ上げてくる。

「ンッ……メガネもドロドロ……はぶ、チュルッ……ンッ、チュルッ……」

右手で修也のペニスを掴んだまま、左手でメガネを取り返した美与は、レンズにこびりついた糊状の精液を、残らず舐め取ってゆく。その顔には恍惚の表情が浮かんでいて、普



段の天真爛漫な彼女と同一人物とはとても思えぬ妖艶さだ。

(ひょっとして、結城先輩、暴走してる!? 僕がメガネ取っちゃったから? でっ、でも、竹刀も持っていないのに……ま、まさか!? 僕の、チンポ握ってるからなの!?)

自分の股間でそそり勃ったままの牡器官をしっかりと握り締めた美与の指を、呆然と見下ろす修也。確かにそれは、男の武器には違いないが、まさか、暴走モードまで呼び出してしまおうとは思わなかった。

「ねえ、顔についた精液取って、あたしの舌に塗りつけて……」

少年のペニスをしっかりと握り締めたまま、美与はとんでもなく淫らな要求をしてくる。「はっ……はいッ!」

命じられると嫌とは言えない少年は、息が止まりそうな興奮を覚えつつ、言われるがままに、淫らきわまりない行動を開始する。ゼリーののように濃厚なスペルマを、震える指で摘み取り、突き出された舌の上にヌルリと塗りつけた。煮ごりのような体液の感触越しに、味蕾のざらつきが指の腹をくすぐってくる。

「んはあ……濃くって美味しいわ……もつとお、もつとヌチャヌチャってしてえ……」

半開きになった口から、スペルマの乗った舌を突き出したまま、行為の続行を命じてくる美与。メガネを取った顔は、可愛らしさの中に、ゾクリとするほどの淫靡さをたたえていて、昨日まで童貞だった少年の理性をあっさりと粉碎してしまう。

「ハア、ハア、ハア、ハア……どっ、どうぞ……ッ」

ピチャ、ピチャ、ピチャ、ピチャ……。

「そつ、そこは……ヒッ！ ひあ！ ソッ……ソソソ……くう……アッ……んふうう……ソッ、やつ……あ、あッ！ ソソソ……ッ！」

子猫がミルクを舐めているような舌なめずりの音と、甘く切なげな少女の喘ぎ声が、女子トイレ内に反響している。

色っぽい声を漏らし、しなやかな肢体をくねらせているのは、近代剣術部の部長を務める少女剣士、三沢玲。普段は伶俐に整っている美貌も、今は身体の奥深くからこみ上げてくる快感に蕩けそうになっており、紅潮した顔を汗で濡れ光らせている。

玲のいでたちは、いつもの剣道着姿ではなかった。

シャープに引き締まったスレンダーな肢体を包んでいるのは、ボディラインにピッチリとフィットした競泳水着であった。濃紺の生地には、レモンイエローのサイドラインが入ったスィムウェアは、今日のために、玲が用意したものであった。

昨日の快樂稽古で、手コキ愛撫に三十分間耐え抜いた修也は、「ご褒美として、何か一つ、キミのリクエストに応えてやろう」と、先輩少女から言われたのだ。

しばし悩んだ末に出した要求が、「競泳水着姿の玲さんとエッチしたいです！」という、いささかフェチっぽいものであった。

意外なりクエストにちょっと驚き、恥ずかしげな表情を浮かべた玲であったが、見事に快樂試練を耐え抜いた少年の忍耐に報いるべく、翌日にはしっかりと水着を着用してきて

くれた。

ご褒美の行為開始から既に数十分が経過し、競泳水着は、肩紐をずらされ、片方の乳房を剥き出しにされて、淫靡な姿に変貌している。

決して大きくはないが、見事なお椀型をした色白な美乳の曲面には、修也がつけたいくつものキスマークが、薄紅色の吸い痕となつて刻印されていた。ピン！と勃起した薄紅色の乳首は、たつぷりと塗りが込まれた唾液で艶めかしく濡れ光っている。

伸縮性に富んだナイロン生地に包まれたままの片側のバストにも、唾液の大きな濡れ染みができており、布地を突き破りそうに勃起した乳首の輪郭が浮き出ていた。

唾液の染みは、胸だけではなく、臍の窪みや、脇腹、さらに、今はグイッ！と脇に寄せられている股布の部分まで、ぐっしよりと濡らして広がっている。こみ上げる欲望のままに、少年が夢中になつて舐め回した名残であつた。

「ひゃうっ！ アッ、ンンンッ、くっ、くすぐりたい……ふぁ！ あああんッ！」

腿の付け根周辺を執拗に舐め回された少女は、着崩れた競泳水着姿で便座に腰掛けた、いささか倒錯的なスタイルで身悶えている。

その前で、犬のように四つんばいになり、ピチャピチャと舐め音を立てている少年は、前をはだけた剣道着の上衣以外は、ほぼ全裸の格好でクンニ奉仕を続けていた。

「はふ……ンッ、チュパ、チュパ、チュパ……ピチュピチュピチュ、ピチャピチャピチャ……チュプッ……はぶ……んっ、クチュッ……チュルルルッ」

唾液と愛液で濡れそぼった股布を大きく横にずらし、剥き出しになった性器に舌を這わせている修也であったが、濡れ蕩けた秘裂の艶姿を見ることはできなかった。

『見られながら舐められるのは恥ずかしいから。目を閉じている！』という玲の命令で、手ぬぐいで目隠しをされた上、目を固く閉じてクンニ奉仕を続けている。

（玲さんのオマ○コ、トロトロで、熱くって、柔らかくて……舐めてるだけで射精しちゃいそうだよ……）

熱い乙女汁に濡れた柔肉の谷間で舌をくねらせながら、少年は今にも暴発してしまいうにいきり勃った勃起をビクッ、ビクンッ、と切なげにヒクつかせている。

視覚を封じたせいで、舌の感覚がかえって鋭敏になり、熱く火照って濡れ蠢く、柔らかな女性器の形状が隅々まで把握できた。

まるやかに盛り上がった大陰唇は、興奮で充血してパツクリと割り開かれ、ワレメの内秘めていた媚粘膜の谷間をあらわにしている。

薄く柔らかな小陰唇は、秘裂に沿って上下する舌にまとわりつき、ヒュクヒュクと小刻みな収縮を繰り返す膣口は、舌先を挿入して掻き回すたびに、熱く甘酸っぱい淫蜜を小射精のように噴き出して、修也の顔を濡れ光らせている。

「んあ……アッ！ そつ、そこは……舐めるなッ！ だつ、ダメ……だッ！」

愛液の源泉である膣口のすぐ上で小さくすぼまった尿道口を、尖らせた舌先でチロチロとくすぐられた玲は、鋭い尿意のような悦波に身を強張らせ、下腹の筋肉を小刻みに収縮

させて裏返った声を上げる。

「ふあ……ゴメンなさい……えっと、ここはどうですか？ チュロツ……チュプツ……ピチュ、ピチュ、ピチュ……」

顔の位置をわずかに上げた修也は、秘裂の上端に位置する、プリッ、とした舌触りの小突起をソフトタッチで舐め回す。

「ひやはうんッ！ そつ、そこも……だッ、ダメだッ！ アッ、ひやう……んんッ！」  
普段の凜々しい声音からは想像もできない、甘く透き通った嬌声を上げて、競泳水着姿の美少女は腰を跳ねさせる。

「チュパツ……玲さんの……クリトリス！ チュツ、チュパチュパチュパチュパ、ピチュピチュピチュピチュッ！ チュウウウウッ!!」

興奮に煽られた少年は、電気ショックを受けたように跳ね回る先輩少女のヒップをガツチリと驚掴みにして逃げ場を封じ、クンニ奉仕を始めたときからずっと狙っていた魅惑の肉粒に集中攻撃をかける。

「だつ、ダメエエ……アツ、やつ、来るッ！ 来ちゃ……ウツ！ あはああああんツ!!」  
最も敏感な肉芽を、貪るように吸いしゃぶられた少女剣士は、唾液まみれの競泳水着に包まれたスレンダーボディを痙攣させながら、女悦の頂点へと駆け上った。

断続的に収縮する膣口から、プシッ、プシュッ！ と迸った絶頂の証を、少年は歓喜の呻き声を漏らしながら残らず啜り込む。

「……、ハア、ハア……こつ、今度は、わたしの番だな……交代だ」

絶頂の余韻を堪能した玲は、律儀に目隠しをしたまま跪いている修也の手を取って立たせ、位置を交代する。先輩少女の温もりが残る便座に腰を下ろした少年の上に、競泳水着姿の玲がまたがってきた。

「キミの舌……きつ、気持ちよかったぞ。だから……もう一つ、ご褒美をやろう……」

恥じらいに震える声でねぎらいの言葉をかけた先輩少女は、ゆっくりと腰を下降させてくる。ガマン汁が滴るほどに濡れ疼いていたペニスが、熱く潤んだ膣口にヌプリと吸い込まれ、尻の谷間に滑り込んできた指が、アヌスの蕾にゆっくりと挿入された。

「ふあ、そつ、そこお……あああうんッ！」

しなやかにくねる指で、直腸壁越しに前立腺を愛撫され、絶頂のわななきが残る熱い膣壁にペニスをきつく締め付けられて、喜悦の声を上げた修也の口を、玲のキスが塞いだ。熱い唾液に濡れた舌が、ヌルリと侵入し、愛液の残り香をまとわせた少年の口腔粘膜を縦横無尽に掻き回す。

「ンンンッ！ んふううう……クチュ、クチュ、クチュ、チュプッ……はう……チュルルッ」

視界を目隠しで封じられたまま、少年はアヌスとペニス、双方の複合快感に酔いしれ、競泳水着に包まれたしなやかな肢体を手探りで愛撫する。

緩やかに上下して肉刀を研ぎ上げているヒップを撫でた手は、汗と愛液、そして修也の

唾液に濡れまみれた尻の谷間に滑り込み、慎ましやかにすばまった蕾をまさぐる。

「ふあ！ そつ、そこは触っちゃダメだ……やつ、ああんッ！ ダメ……あぁ……」

最も恥ずかしい不浄の門を、ソフトタッチで撫で回された黒髪少女は、競泳水着に包まれた肢体をくねらせて恥じらい悶える。

「玲さんだつて……僕のお尻、弄ってるじゃないですか。んふう……だつ、だから、僕も……はぷ……ハムハムハム……コリッ！」

キスを振りほどいて恥ずかしげな声を上げる玲のアヌスを優しく押し揉んで恥悦を送り込みながら、少年は競泳水着の胸元に唇を這わせ、薄いナイロン生地をツンと突き上げた勃起乳首を探り当てて甘噛みを仕掛ける。

「くあ！ はああんっ！ 修也あ！」

甘く裏返った声を女子トイレ内に響かせて、黒髪ショートカットがよく似合う凛々しい美少女は、引き締まった肢体をのけぞらせた。水着の下で、前歯に噛み挟まれた勃起乳首がビクビクと痙攣し、指先を咥え込んだ肛門が断続的に絞まる。

（玲さん、もつと気持ちよくしてあげます……）

男の悦びに身を震わせた少年は、きつく抱き寄せたスレンダーボディを小刻みに揺すり、勃起を力強くヒクつかせて、膣奥を掻き回してやる。

「ふあ！ アッ、アッ、あぁあぁ……ッ!!」

切羽詰まった声を上げた玲の肢体が、修也の上で色っぽくくねり、アヌスとヴァギナが

絶頂寸前のわななきを起こした。

「はぶう……玲さん……いつ、いつて……ください……ッ」

興奮にかすれた声を上げた修也は、アヌスを弄っていた指を深々とめり込ませ、もう一方の手指を、密着した下腹の狭間にこじ入れて、秘裂の上端でプリッ、としこったクリトリスを捉える。

「ひゃあうんッ!!」

最も敏感な突起を、キュッ、と摘まれた玲は、凜々しい少女剣士とは思えぬ可愛らしく裏返った悲鳴を上げて硬直する。

「玲さん……ガマンせずに、イッチャっていいんですよ……」

又チュッ、クチュクチュクチュクチュッ、キュッ、キムッ、クリクリクリッ!!

全身をギクッ、ギクッ、と緊張させて、押し寄せる絶頂の波頭に耐えている少女の肛門とヴァギナを甘く挟りながら、摘んだ肉突起を少しハードに揉み転がした。

「ひああああ……ンッ! クウウウッ! イ……クッ! んんんん〜ンッ!!」

いつもの癖で、指をしつかりと噛んでしまった声の堪えながら、玲は競泳水着に包まれた身体を激しくのけぞらせて絶頂へと舞い上がる。

鍛え抜かれた肢体を、歓喜の痙攣が駆け抜け、肉刀を包み込んだ粘膜鞘が、複雑なヴァイブレーションとうねりを起こしてスペルマの放出をねだる。

「くふうううう! ぼっ、僕も……でッ、出ちゃう……ッ!!」





玲から教わった呼吸法で、射精筋の痙攣を抑え込むことに成功した修也は、安堵とともに自信を深めてゆく。

しかし、騎乗位ローテーションも、何周か続けているうちに、次第に激しさを増してきた。三者三様に気持ちのいい粘膜鞘が、少年の肉刀を根本まで呑み込み、上下動に前後のくねりや円運動まで交えた淫靡な腰使いで快感を貪ってくる。

腰の奥に溜め込まれた快感が、むず痒い圧力を高めながらグルグルと渦巻き、いつ射精してしまってもおかしくない状態に、少年を追い詰めている。

「ンンンンッ！ アフウンッ、修也殿……アッ、ンンンンッ！」

今、射精を必死に堪える修也の上で裸身を揺れ弾ませているのは、金髪の少女騎士、クロエであった。

激しい上下動の反動で、金色のポニーテールが振り乱され、恍惚の表情を浮かべてのけぞった純白の裸身が、喜びの震えを起こしながらパァッ、と紅潮する。

高貴な美貌を欲情で紅潮させ、夢中になって腰を振る少女のヴァギナは、肉厚な粘膜組織で勃起全体をピッチリと包み込み、緩やかな蠕動で、奥へ、奥へと龟头を引き込んで、柔らかな唇を思わせる子宮口で吸いついばんでくる。

「クロエ……抜け駆けした詫びを、今、するぞ……」

騎乗位で乱れる金髪少女に寄り添った玲は、快感に負けて崩れ落ちそうになる細腰を支えてやりながら、汗にぬめった美乳を、優しい指使いで揉みこね始めた。

「アハアンツ！ れつ、玲殿お……」

同性でありながら、秘めた想いを抱いていた先輩少女に、敏感なバストを愛撫され、高貴な美貌をうっとりとして蕩けさせるクロエ。

「美与ちゃんも協力するよ、クロッチ。ほおら、必殺の爆乳全身パイズリだよお」

クロエの背にすがりついた美与は、金髪少女の秘裂を愛撫しながら、身体をくねらせて、自慢の爆乳で少女の尻から背筋をムニユムニユと擦り上げる。もう一方の手指は、修也の股間に滑り込み、お気に入りの『タマタマちゃん』を絶妙の力加減で揉みくすぐって刺激していた。

「みっ、美与殿まで……ふぁ！ そっ、そこはダメですうツ!!」

「クロッチのクリちゃん、ピンピンのプルプルになってるよ。アハア、修びよんのオチンチンを啜え込んだオマ○コも、凄くヒクヒクしてる。気持ちいいんだね……」

小悪魔的な表情を浮かべたツンテールの巨乳メガネっ娘は、ペニスで串刺しにされた裸身を悶えさせているクロエの陰核を摘んで揉み転がしつつ、小柄なダイナマイトボディを艶めかしくくねらせて、騎士娘の裸身全体にパイズリ愛撫を仕掛けている。

三人がかりの愛撫を受けた金髪少女の裸身は、絶え間ない痙攣を起こし、ヴァギナも激しくうねって悦びを伝えてくる。

「修也……クロエを果てさせてやってくれ……」

透明感のあるピンク色をした、白人少女の乳首を巧みな指使いで揉み上げて可愛がりな

がら、玲が命じてくる。

返事する代わりに、修也は腰をせり上げ、より深く、激しく突き上げることで、少女達の期待に応えてやった。

ズンッ！ ズンッ、ズンッ！ ズチュズチュズチュズチュ、ズチュンッ！！

声なき悲鳴を上げて痙攣するクロエの身体を浮き上がらせて、たくましい成長を遂げた男の武器がヴァギナを挟る。

「修也殿オオオオオッ！ ヤッ、アッ、クワアアアアアアアッ！！」

金色のポニーテールを翻らせてのけぞり、クロエは女悦の頂点を極めた。しなやかな裸身を弓なりに反らせて痙攣する金髪少女のヴァギナが、断続的な収縮を起こして勃起を締め上げてくる。これまで、かろうじて射精を堪えていたペニスの芯を喜びの電流が走り抜け、制御不能の脈動が始まる。

「ああアッ！ 出ますッ！ はああああッ！！」

長く尾を引く絶頂の叫びを剣道場に響かせながら、修也は体内で限界まで煮詰められた特濃のスペルマを解き放った。

ドクウウンッ！ ドクドクドクドクウウンッ！ ビュッ、ビュッ、ビュウウウッ！ ビュルッ、ビュクンッ、ビュクンッ、ドプルルルッ！

制御不能の脈動が起きるたびに、騎乗位でクロエを貫いたままの修也の裸身が、ビクッ、ビクンッ！ と跳ね上がる。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**